

淨土

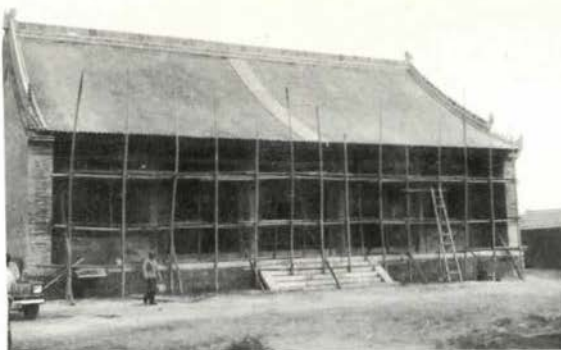
1980-2

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投函承認雜誌) 第三五号
昭和五十五年一月二十五日印刷 昭和五十五年二月一日発行
第四十六卷 第二号



中国のこと

去年の暮機会に恵まれ、大正大学日中友好訪問団一行二十五名に参加させていただき、



十二月十六日より二十九日迄の二週間、中国に行つてまいりました。訪中した都市は、北京、西安、洛陽、邠州です。たいした降りではありませんでしたが、北京では雪にあい、天壇等の雪景色も印象的でした。北京では中国仏教会の本部のある広済寺をお詣りし、あと道教々会、故宮、歴史博物館等を見学しました。また、霧のため西安に行く飛行機が出ず、一日よけいに北京に滞在しました。

西安では一行とは別に、我々浄土宗の役員は香積寺にお詣りして来しました。丁度、大正大学父兄会長をなさっている、東京、梅窓院の中島真哉先生をはじめ、大正大学専任講師の赤平和順先生、大正大学国文学副手の魚尾孝久さんと、小生の自坊の檀家、二本松嘉端氏、もう一人宇都宮商業高校教諭で大正大学出身の松本弘元さんと小生の以上六人で、修

理中の善導大師十三層墓塔の前で、中島先生を御導師に一行でお経をあげてまいりました。御堂の方も写真の通り、建築がすんでおり、本年の善導大師一三〇〇年の法要まで十分まにあいそうです。丁度、住職をはじめ、村の人等も我々一行を待っていてくれ、また案内した通訳も浄土宗の友好の翼、すなわち稲岡前総長を団長とする、友好訪問団一行が来て法要をした時の模様を話してくれました。最初稲岡前総長一行が行かれた時は、道路もひどかったものと思います。現在は自動車を通れるようになっております。西安は長安の名で知られた古都で、京都、奈良と姉妹都市になっており、鼓楼、鐘樓や大雁塔など古い建築が目につく町です。

現在中国は、まず人口が十億といわれるだけあり、人が町にあふれています。自転車もたくさん目につきますが、これも十人に一台の割りだそうですが、それでも一億台はあるわけです。しかしこの労働力は近代化に大きな役割りを果たすことは確実です。

(佐藤行信)

二月号



深心と言うはすなわちこれ深く信ずるの心なり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.100)

目次

法話

涅槃会に憶う……………吉川哲雄……(2)

善導大師のご法語

熾烈な信心と懺悔……………村瀬秀雄……(6)

留学の頃さまざま……………上住節子……(14)

＜随想＞ほとけとの出会い(六)……………佐竹隆三……(10)

特別寄稿

観音菩薩と霊場めぐり……………曾田文雄……(19)

心の日々

——『論語』のことば——……………霧林道義……(32)

浄土句集……………一田牛畝選……(28)

＜句会だより＞一田牛畝先生歓迎句会……………塩山三九……(30)

＜表紙のことば＞寒紅梅……………土屋正男……(18)

＜表紙裏・巻題言＞中国のこと……………佐藤行信

念仏ひじり三国志⑩——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話



涅槃会に憶う

吉 川 哲 雄
よし かわ てつ ゆう

(大本山光明寺執事長
横浜市三仏寺住職)

沙羅樹の園は風もなく
父とも仰ぐお釈迦さま
静かに去らせ給いけり
その日は二月十五日

誰の作詩であったか失念しました。又歌詞に誤りがあるかも知れませんが、昭和の初期東京小石川の伝通会館日曜学校で子供達と唱和した讃仏歌の一節が、今、頭に浮んで参りました。二月十五日、この日は四月八日の降誕会、十二月八日の成道会と共に我々仏教徒にとっては大聖日であり、心から合掌し敬虔な誠を捧ぐべき日であります。

憶いますに、釈尊の生涯は大地と共にありました。そ

の生誕は王子としての高位にありながらも無憂樹の花がたわなに咲き乱れるルンビニの園の上であり、その成道はニレンゼン河畔の菩提樹下吉祥草の上であり、又その最期は沙羅双樹下の座具の上であられました。そして四十五年に互る伝道の一步一步は正しく大地を踏みしめた象歩でありました。御母マヤ夫人が白象が右脇より胎内に入ると夢見て釈尊を宿したと云われて居りますが、このことは釈尊の一生を暗示して居るよう思われます。象のあの巨大な体に似合わぬ可憐な目と、その歩みの堂々と大地を踏みしめて行く姿を思う時、慈悲行に徹し、正法を伝える為に、その生涯を力強く法輪を転ぜられた釈尊を暗示するものがあります。

三十五才の十二月八日、明星の瞬きと共に、仏となら

れた釈尊のその大悟の内容は我々凡夫の伺い知る所のものではありません。伝える所によりますと、縁起の道理を悟られたと云われて居ります。宇宙の森羅万象は互にもちつまたれつの相関関係にあり、その一つ一つがすべて一大生命の顯現であることを内証せられた釈尊は直ちに合掌し南無仏と称えられ、その後七日間はこの平安な悟りの境界に身をひたされて居りましたが、釈尊の成道を知った梵天が衆生済度の為速やかにその座を立たれることを三度に及び勸請した結果、遂にその座を立ち衆生教化の旅に出立せられました。先ず最初にかつては同学の友であったが、求道の途中釈尊から去って行った憍陳如等五人の比丘を鹿野苑に於て度せられ、以来四十五年の間各地に法雨を注がれました。齡八十年を迎えられた頃になりますとさすがに身体の衰を感じられるようになりました。三十五才にして成仏されたとは申せ、人間としての束縛は如何ともなし得ぬ所であります。伝道の途中で幾度か背中や腰の痛みを弟子達に告げられたと云われて居ります。釈尊最後の伝道の様子を記述して居る書物を読む時、私自身何か心の痛みを感じることがあります。入滅の前年釈尊は竹林精舎で三ヶ月の安居を過され

ましたが、その年はその地方は非常な饑饉であつた為、多くの弟子達と共に伝道の旅を続けることが困難となり、ただ阿難一人を伴われてクシナガラへと向かわれました。すでにこの頃は釈尊の双壁とも云われた舍利弗、目連の二人は相續いて亡くなって居ります。人間釈尊として愛弟子に先立たれた淋しさはどんなものであつたか推察することは僭上の沙汰でありましょうか？途中バーバーの金工純陀が献じた葺を食して病いを得られましたが、病体に鞭打つての旅を続けられました。その間の状態を經典は次のような偈をもつて説かれて居ります。

かくの如く我は聞く 鍛冶師ジュンダの食を
召し 賢者は病を得たもうた 死ぬるばかり
なる重き病を 供養の葺をめし給い 重い病
を得させ給い腹くだけつつ世尊はいふ クシ
ナガラへ我は行こうと

(増谷文雄『仏教百話』より)

旅の果、クシナガラ城外に至つて遂に苦痛に耐えかねた釈尊は「阿難よ、私は疲れた。床を敷いて欲しい。」

と申され、阿難に命じ沙羅双樹の間に座具を敷かせ横になられました。師の病い重しと聞き伝えた弟子達が各地から集まって参りました。その折須跋陀羅と云う一人の外道が最後の教化を受けようとして、病床に釈尊を尋ねました。阿難は師の重病を案じて之を断ろうとしましたが、釈尊は之を止め病床近く彼を呼んで教えを垂れました。之が最後の弟子であります。続いて病床を囲んだ多くの弟子達に最後の法門を説かれましたが、之が遺教経であります。その経の前文にこのように記されて居ります。

釈迦牟尼仏初めに法輪を転じて阿若憍陳如を度し、最後の説法に須跋陀羅を度し給う。度すべき者は皆已に度し訖^{おしま}って沙羅双樹の間に於て將に涅槃に入り給わんとす。この時中夜寂然として声なし。諸の弟子の為に略して法要を説き給う 云云

この文を拝読する時、大聖釈尊の最後の嚴肅なる光景が眼前に浮び、襟を正す思いがいたします。遺教経の内

容についてはここに記述するページを持ちませんが、精進、知足、禪定、智慧等比丘としての重要な戒が説かれて居ります。自分が亡き後は波羅提木叉(戒)を大切にせよ、之によつてお前達は闇夜に灯を得、貧しき者が宝を得たようなものである、若し自分が更に生き続けたとしても、之に異なるとはならない、と説かれて居ります。そしてこの最期の教えを説かれた後三度に及んで弟子達に、「何か質問することはないか、疑を正すことはないか」と苦しい息の下から問いかけて居られますが、誰一人として声を出す者はなく、阿難が代表して「私達弟子達は師の教えに対して一人として疑問を残すものはありません」と答えて居ります。之を聞き終つて釈尊は静かにうなづき、灯の消えるが如く寂靜の境、即ち眞の涅槃に入られたのです。その日こそ二月十五日であります。その間の状態をある詩人は次のように述べて居ります。

この世に生きとし生ける者は
いつかその身命をすてねばならぬ
たぐいなき如来力ある正覚者
かかる師もまた逝きませるがな

ゆるぎなき心をもて

よく苦痛にたえたまい

ともし火の消ゆるが如く

いまブツダは滅したもうた

(仏教伝道協会『伝道句集』より)

今釈尊が入滅されてからここに二四六六年、肉体は沙羅双樹の間に消えられましたが、その遺された法の灯は燦然として今日に輝き、広くしては大乗、小乗の仏教として、はた亦我が国に於てはあるいは只管打座として、又は称題等々として特に我等浄土教徒にとってはありがたい称名念仏の救いの白道として、その輝きを増して来ました。遺教経で比丘達に示された酷しい持戒の道は到底我々のたどり得ぬ所であります。本年善導大師千三百年遠忌正当の歳でありますが、生涯を持戒堅固に過ぎられた大師ご自身ですら人間の弱さ、罪業の深さに涙され至心に懺悔し、ひたすら浄土への往生を願求して、二河白道の譬をもって我々に示されて居ります。又わが宗祖法然上人は比叡の山に於て智慧第一と称せられながらも深く人間としての悲しき性を見つめられ「わがこの身は戒

行において一戒もたまたず、禪定において一つもこれを得ず。(略)かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん」と嘆ぜられています。まして末世に生きる我等凡夫に於ておやであります。然しこの凡愚低下の我等のために釈尊は一筋の救いの道を遺して下されました。之が浄土の教えであります。即ち観無量寿経の中に於て「汝よくこの語を持て、この語を持てとは無量寿仏のみ名を持てとなり」と称名念仏の一道を愛弟子阿難に附囑して居られます。

涅槃会に当って各寺々では涅槃像を掲げそれぞれ法要を営みますが、その画像には多くの弟子たちは勿論、鳥獸を含めて生きとし生けるものが釈尊の入滅を悲しんで居る姿が画かれています。私はその中で悲しみの極み涙の渦果てた阿難が釈尊の脇に横臥して居る姿に入心被打れます。二十五年の間釈尊に随侍し苦楽を共にして来た阿難が、その師に永別した悲しみが手に取るようにわかります。今この聖日にあたり遺教経に示された釈尊の言々句々に対し襟を正すと共に、阿難に附属された称名念仏の一行を有難く頂戴し心から合掌する次第であります。

熾烈な信心と懺悔

善導大師の時代は後世にまで貞観の治と称され、模範的治績を残したと賞讃されている唐の太宗の時代であった。このよき時代に即応するかのように、仏教界に永くその名を讃えられている高僧たちが輩出した。同時代に活躍した高僧の中には『統高僧伝』を撰した南山大師道宣がいたし、『大唐西域記』と訳経で有名な玄奘三蔵がいた。また玄奘の弟子に慈恩大師窺基がいたし、真言宗の善無畏、華嚴宗の法蔵がいた。このような錚々たる高僧の中にあって、善導大師は特に「仏法が東行して以来まれにみる盛徳な禪師であった」と賞讃され、後世には弥陀の化身であったとまで崇められたのであるから、大師がいかに大きな足跡

を残したかがわかる。

念仏行者としての大師については、力がつきるまで念仏を唱え続け、寒冷の時でも汗を流して唱え続けたといわれ、同時に、『阿弥陀経』を書写すること十萬巻、浄土変相を描くこと三百鋪、多くの塔廟を修復したといわれている。大師の日常の姿については、常に戒品を護持し、かつて目を挙げて女を見ず、一切の名利を捨てて他人と綺詞戲笑することなく、世事の論談を嫌って人と行を共にしなかった。もし十分な供養を受けることあった時には、それを厨房に廻して徒衆に与え、自らは身を支えるだけの粗食であったと伝えられている。また大師は京師に入って広く教化に努めた



むら
村瀬
せ
秀
ひで
雄
お

ので、大師に従って念仏の教えを奉ずる者が無数にあった。大師の弟子となった僧尼士女の中には阿弥陀経を誦すること十万乃至三十万遍に及んだ者があつたし、あるいは日課念仏を一万五千乃至十万遍までも唱える者があつたというのであるから、大師の教化力がいかに優れていたかがわかる。それというのも、大師自らが百万人の非難攻撃に逢つても微動だにしない意氣軒昂たる信心を持っていたし、巖をも通す堅い信心によつて教化を行ったからに外ならない。念仏行者はいかに堅い信心をもつて念仏を唱えるべきであるかについては、『観経四帖疏』の中で凡そ次のように説いていることでわかる。

『無量寿経』には阿弥陀仏が四十八願を成就し給ひ、念仏を唱える者は一人も洩らさず往生させると説かれてゐる。仏の慈悲に対して少しの疑念も挟むことなく、思慮を廻らすこともなく、深く信じて念仏を唱えれば、罪業のあるなしに拘らず誰でも本願力に乗じて往生できるのである。釈尊は『観無量寿経』を説いて極楽世界の功德を讃

歎し、人々に心から極楽世界を慕う心を起させ給うた。『阿弥陀経』にはまた十万の無数の仏たちが口を揃えて念仏往生が真実の法門であることを証明し、この法門によつて修行すべきことを人々に勧め給うている。人々はただ仏の慈悲を仰ぎ、身命を惜しまずに仏の言葉を信じ、教えに従つて念仏を唱えなければならぬ。こうして仏の教えと心と本願とに随順する者をこそ眞の仏弟子といふべきである。

信仰と修行とを異にする人々が来つて多くの経論を引用し、念仏信仰を批判し、罪障の深い凡夫が往生できる道理がないと論難しても、己れの信仰を固めて怯むことなく、己れの信心を破られてはいけない。たとえ百万千万の人々が集まり来つて、凡夫が往生できる道理がないと論難したにしても、念仏信仰の行者たちは信心を決定し、些かの疑念を持つてはならぬ。返つてそれらの人々に信仰の姿を披露していくがよい。「釈尊の教法は必ず達成できる完全な法門であるから、いかに大勢の者が集つて、一斉に非難攻撃を行ったにして

も法門を破ることができない」と。

念仏行者はあくまで阿弥陀仏の本願を深く信じて念仏を唱え、自らの信心に対して強い確信を持たなくてはならぬ。たとえ高位の菩薩が一人でも多勢でも、いや雲の如くに集まり来って異口同音に念仏往生の法門を非難して、信ずるに足らぬ虚妄の法門であると説いたにしても、行者は全く耳を貸す必要がないのである。何故ならいかなる菩薩であっても仏の言葉に異説を立てることができないからである。

更にまた諸仏や化仏が一仏でも多仏でも、いや世界に遍満するばかりに多く現われ、それぞれに光明を放ち、舌相を示して己れの言葉に誤りがないと誓いながら、口々に念仏往生は虚妄な法門であると説き給うたにしても、念仏行者は信心に一念の疑念も起してはならぬ。念仏行者は諸仏や化仏の言葉に畏れを懐くことなく、信心をますます増長せしめて退失することなく、念仏を唱えれば必ず往生できることを深く信じなければならぬ。何故なら一仏は一切仏に通ずるのであって、釈尊

の教法は同じく一切仏の教法であり、念仏の法門もまた一切仏に通ずる法門である。例えば十方にまします無数の仏たちは、釈尊の教法を信じない者がないようにと、同じ心から同時に舌相を示して全世界を覆い、誓って念仏往生の教法が真実であることを証明し、人々に念仏の法門を勧め給うているが、これもまた一切の教法が一切仏の教法に通じていることの証しである。

大師はこのように説いて、念仏行者は何ものにも動じない強固な信心を確立しなければならぬと激励している。その反面において、大師は己れを律するに誠に厳しいものがあつた。深心とはまず第一に自身は現に罪惡生死の凡夫であることを深く信ずることであるとしたのも、その現われである。しかも無間修とは正行を修めるのに雑行ばかりでなく、貪りや怒り等の煩惱によつても間断されないのであるとし、もし煩惱が起つて正行が間断された場合には、その都度直ちに懺悔するのであつて、時が経過したり、日が改つてから懺悔することがあつてはならぬとして、随犯随懺すべき

ことを説いている。そして懺悔の仕方については、「往生礼讃偈」の中で凡そ次のように説いている。

懺悔は十方世界にあまねく遍満し給うている三宝に対して行うものであり、同時にすべての人々に向って行うものである。この心得さえあれば仏像もなく、聞きとどけてくれる者のない時に、自分自身に向って独りで懺悔してもよいのである。

そして懺悔するにはまず仏の教法を心から信じ、聖者たちを恭しく敬い、身を惜しまない覚悟をもち、心に深く徹し、骨身に應えて行い、細大もみらずに些細な罪に至るまでを告白し、かつ懺悔しなければならぬ。

懺悔の仕方には上品、中品、下品の三種類がある。上品懺悔とは全身の毛孔から血が流れ出し、眼から血が迸るばかりに痛烈に懺悔することである。中品懺悔とは全身から熱汗を流し、眼から血を流すばかりに懺悔することである。下品懺悔とは身体が熱く火照り、眼から涙を流して懺悔することである。このように懺悔すれば、遠い昔から今に至るまでに犯した罪の報いが同時にことごと

く滅し尽される。もしこのように真剣に懺悔するのでなければ、たとえ昼夜を通して急いで走り廻るように忙しく懺悔し続けたにしても、全く益のないことであって、懺悔しなかったのと同じことである。ただしたとえ涙を流したり、目から血が迸るほどの懺悔ができない者であっても、少なくとも内心と外形とが全く一致して真実まことの心に徹して懺悔しなければならぬ。

また大師は懺悔文として要、略、広の三つを出している。そして「要懺悔文」では来迎引接の本願力に乗じて、自他ともに極楽世界に往生することを願い、「略懺悔文」では五種の懺悔法を挙げ、それぞれに至心に阿弥陀仏に帰命し奉っている。「広懺悔」では無数の殺生、偷盜、邪心、妄語、綺語、悪口、両舌、破戒の罪を懺悔し、次いで「願わくは法界の衆生とともに、邪を捨てて正に歸し、菩提心をおこし、慈心をもって相向い、仏眼をもって相みて、菩提まで眷属として真の善知識となり、同じく阿弥陀仏国に生じ、すなわち成仏に至らん」という。

〈随想〉

ほとけとの出会い (六)

佐^さ竹^{たけ}隆^{りゅう}三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)

さきにも書きましたように、『自我と無我』(中村元編・平楽寺書店刊)という本は、わたくしにとって終生忘れることのできない、まさにおそるべき書であるというべきであります。

この書は、ソンディ心理学の流れをくむ深層心理学者としてのわたくしに、仏教の無我論に立ちむかわせ、否応なしにそれとの対決を迫ったからであります。安易な妥協が許されないものとするならば、こちらが仏教の無我論を論破して真の意味での正しい自我心理学を樹立し、それを不動のものとして確定するか、あるいは逆に仏教の無我論の軍門の前に屈伏して、おのれの立場を失って完全に吸収されて

しまいか——このいずれかの道をとって歩むように追いこまれて、絶対絶命の危機的状况に立ち至ったと感じたからであります。

一冊の本をこれほど時間をかけて何回も読みかえし、これほど真剣に取組むなどということとはこれまではなく、この書がはじめての経験であります。その意味で、わたくしの人生にとって、これほど強烈な印象を与えた本は、他に比較すべきものがないと思います。

人生において良き師、良き友に出会うことは大きな幸せであります。良書とめぐりあうこともそれにおとらず有難いことだと思えます。



この書を読むようにすすめて下さった壬生台舜先生と、この書の執筆者の諸先生に対して、改めて厚く御礼を申し上げたいと思います。

さきにも述べましたが、玉城先生の論旨はまことに明快で快刀乱麻を断つ感がありました。とくに興味を感じて読んだ箇所は、「内在性の問題——サーンキヤ、唯識、フロイト」の章と「超越性の問題」の章であります。このことはさきにとばした第一部と第二部をあつて読みかえす際に大役立ちしました。

当時本書と平行して「仏教の思想」（角川書店刊、全十二巻）の第二巻『存在の分析／＼アビダルマ』、第三巻『空の論理／＼中観』、第四巻『認識と超越／＼唯識』を読んでおり、とくに「唯識」に興味をひかれ唯識哲学と深層心理学との関連について考察を進めてあれこれ考えておりましたが、あまりの難解さに困りはてていました。

ところが、まことに不思議な機縁で本学の塩入良道教授と親しくお話しをする機会があり、その時に

アビダルマは煩雑ではあるけれども体系的であるので比較的わかり易いが、「唯識」と「中観」はとりつくしもない程難しいと申上げたところ、唯識についてはこの本を読んだらいいでしょうとおっしゃって、あとで結城令聞博士のみにくい論文抜刷の小冊子を頂戴しました。この本は簡潔でしかも比較적のわかり易く書いてありましたが、同時にまた同博士には『心意識より見たる唯識思想史の研究』（東方文化学院刊）と『世親唯識の研究』上（青山書院刊）の二つのすぐれた名著のあることもわかりました。

塩入良道教授とはこれを機縁にお近づきを願うことになりましたが、先生は本学のカウンセリング研究所のあり方とその発展についてなみなみならぬ関心を寄せられ、健康上の理由でわたくしがカウンセリング研究所主任を辞した後も、適切なアドヴァイスや励ましのお言葉を頂き、有難いことだと思っています。

昨年三月八日神楽坂「千月」で行われた「松柏会」（学位号を所有する大正大学教授の集まり）でまた塩入教授とお会いする機会があり、その時たまたま

仏教のことが話題になった際に、わたくしは自分の才能に絶望している——というのは「阿毘達磨俱舍論」・「中論（空の論理）」・「唯識哲学」という仏教の三本の基柱ともいふべきものが一向に理解できない、したがってわたくしには仏教を本當に正しく理解できないのではないか——という告白をしたことがあります。その時、先生は、

「貴方がそんなことが言えるということは、かなり仏教がわかってきたからで、自分の才能に絶望するなどと軽々しく言うものではありませんよ。まあ、氣長にじっくりとやるのが肝要ですね。」と言われて励まされたことは、今もなお記憶に鮮烈です。

唯識に関するわたくし自身の考察が進んでいませんで、まだ塩入教授に質問に行く段階ではありませんが、いずれ御教示を得たいものと考えます。

「仏教の思想」の第四卷『認識と超越へ唯識Ⅴ』（服部正明・上山春平著）という本は、わたくしにとっては非常に有難い解説書でありましたが、とくに服部先生の担当執筆された第一部の箇所は難解で、何

回読みかえしても十分に理解できたという確信に達することはできなかったようであります。

しかしながら、唯識哲学を学んでわたくしが理解しえたことと言えば、次に述べるような一つのことだけであります。

心に生ずる表象は、心の流れの特殊な変化に起因するものであり、表象される対象が外界に実在するのではないとすれば、われわれの日常経験は夢にも比せられるでありましょう。事実、ヴァスバンダウ（Vasubandhu 世親）は反論者の問いに答る際に、夢の喩えを用いたのであります。また、彼以後の唯識思想家たちも、実在しない対象を見る夢の中の意識を、唯識説を説明する適切な比喻としてしばしばとりあげているようであります。

しかし、夢の中で見た対象は目ざめたときには消滅するから、実在しないことがはっきりとわかるのであります。目ざめているときに見る対象については、それと同様のことが経験されないということになります。このことを指摘する反論者に対して、

ヴァスバンドゥはどう答えたのでしょうか。

「夢の中で見る対象が実在しないことを、いまだ目ざめていない人は悟らない。」

この短かいヴァスバンドゥの答えは、私の心臓にぐざりと刃のように突きささったのであります。

夢をみている人は、自分の意識にあらわれる対象が実際には存在しないということを知らない。それは当然と言えましょう。しかし、「世間の人々の日常経験も同じ」ことであるとヴァスバンドゥは主張しているようでありますが、わたくしにはこのところが論理の飛躍があるようで、長い間なかなか納得できなかったのであります。

わたくしは覚者ではないから、覚醒時の体験と夢の体験とは違うと思うのでしょうか。わたくしは外界の対象が存在するという誤まった観念を過去世からくり返してきているために、その潜在余力の眠りに深くおちいり、対象が実際には存在しないことを理解することができないのでしょうか。

しかしながら、その潜在余力と対抗するもの、すなわち表象をもたない超世間的な知識を得て目ざめたときには、その超世間的知識に続いて得られる清浄な世間的知識によって、対象が実在しないことを明らかに悟ることができるのでしょうか。

右に述べたヴァスバンドゥの答論は、唯識哲学が経験的認識の夢からさめること、超世間的な知識を得ることを根本的な課題として示しているようであります。

経験的認識がすべての人に共通しているということは、その認識が正しいということの意味はしないでしょう。過去世における同質の業によって、みな同じ夢をみているにすぎないのであります。経験的認識の普遍妥当性を根本的事実として、その認識の成立根拠を問うことは唯識思想家たちの意図ではなく、彼らは経験的認識の一切を「業」と知って、業を超える立場を追求することを関心の焦点としたと思われまゝ。

(つづく)

留学の頃さまざま

上^{うえ}住^{ずみ}節^{せつ}子^こ

(玉川大学助教授)



ワシントンD・Cの空は果しなく青い。

だが、きりきりと肌を刺す冬の寒さ……木枯の頃を想うたびに、今もさまざまな痛みや喜びが心の中を駆けめぐる。

アメリカ文学の香りを早くこの目で確かめたく、辛い旅を予想したが、サンフランシスコから五日間、グレイホンドバスに乗りついで西から東に往断、ワシントンD・Cについたのは、からりと晴れた秋の午後だった。

開拓当時の米国を偲ぶには充分なほど、ビュリータンで素朴な老夫婦の住家が下宿先ときまった。朝食の

ーブルごしに、八十歳をこす夫妻が、ハニー、ハニーとよびあっているのに驚きを感じながら、これまた、カッブの底の見えるほど薄いコーヒーを啜ってみた。

食欲は何日たっても一向に湧いてこない。宿題の山は大きくなる一方なのに、夜タイプを打つのは禁止、教会やサンデースクールに出席させられるし、たまらなくなつて大学の近くにアパートを見つけて移ることにした。別れるとき、おばあさんが目に涙をためて、^{「セツコ、必ず又会いにきてね」}と何度も言つて頬にキスしてくれたのを思い出すと、引越したことが何か悪いことでもし

たように思えてならない。

大学では、女子学生寮を勧めてくれたが、アパートにした。寮の半分の経費で家具つきの二部屋、暖房つき、お湯もふんだんに使える。徹夜でタイプを打つても文句は出ないし、マーケットでお米を買ってきて日本的な食事さえ出来たのには感激だった。

x x x

大学院への入学は、すでに日本で大学を出て、大学院に籍をおいているということと、単位取得証明書、成績表、推薦状などの提出によって入学を許可されていたが、日本の大学では要求されていないが、この大学では要求されている学部のカリキュラムを数種類多く取らされることになってしまった。

ところが、実はこの後が難関だと思ひ知らされるのに一週間もかからなかった。毎週二、三種類のレポートの他に、七、八冊の本を読んで、一冊ごとの内容の要約と論評をタイプして提出するという仕事待ちかまえていた。日本語なら、はすに読むことも出来るが、教科書の

他にこれほど大量に読むのにはまず時間がかかる。提出した一枚一枚に点数や寸評がついて戻ってくる。一年間には膨大な数になるはずだ。ある日、教授から呼びだしを受けたので行ってみると、一枚足りないということ、こちらも数が多いので出し忘れていたらしい。なんとも面倒見の良いことかと感心してしまふ。

さらに、前・後期の期末テストに、二課目以上「不充分」という名称の成績をもらったが最後、学校にはいられなくなる……という恐怖とスリルの連続だ。そして最後のしめくりは、卒業の「総合テスト」で、これは全課目に渡って試験される。この日に失敗すれば修士号はあきらめなければならぬ。

勿論こういう制度も大学によって大きな違いがあったから、例えば学校をかわったり、聴講だけにすればことは簡単だったが、ともかく二年半のうちに修士を終了したので引き続き大学院に残ることになった。

x x x

日本の大学では、外人教授との会話や講義も苦になら

なかったので気楽な気分で授業に出たが、思わぬ伏兵があった。俗語である。確か教育哲学の時間に、教授がさかんに「キック・ザ・バケット」——バケツを蹴飛ばす——と言っている。さっぱり解らないので困ってしまったが、死ぬという意味だった。アメリカ人の学生が相手なのだから、フルスピードで俗語をまじえてしゃべったとしても不思議ではない。授業もさることながら、実生活も万事この調子である。自分で俗語を使う必要はないが、理解する能力は是非欲しい。

留学する前に、「話す」ことばかり気にかける人が多いが、私は、むしろ「聞く」練習に重点をおいた方がよいのと思う。聞くことが出来なければ、イエスもノーも出てこない。それも、日本人学生向けのテープなどではなく、英語を母国語にしている人達を対象にした色々なスピーチや討論、ドラマでなければならない。

x x x

ある日、ふと気がつくと、あまり本とばかりおつき合っていたせいか、顔も腕も青白くなっている。そこ

で、ちょうど留学二年目に入り少々余裕も出来てきたので、未知らぬ土地に小旅行をこころみたり、YWCAで水泳やヨガのレッスンを受けるのを生活の一部にくみいれるようになる。

長い留学中にはどうしてもホームシックになったりする。アメリカでの四回目の元旦を独りで迎えた時、父や妹のスケッチ入りの手紙や、母のそれはそれは長い手紙を読んでいるうち、ひょっとしたら私は大変な親不孝人間ではないか……と、ふと思ったりした。

このような日々の中では、時には日本語でしゃべりあえる友人も大切だ。大学附属病院のドクター加藤はいつも元気で威勢が良い。たまたまばったり出会うと、所かまわず、「やっ、貧血だな、栄養失調だあ」などと大きな声で言う。次の日郵便受けにビタミン剤が入っていたりする。お礼に彼のアメリカ人のフィアンセに着物を着せてあげたらもう大喜びである。病気になるたら一切引きうけてくれるはずだったが、ならずじまだった。

x x x

目抜き通りのビル街の眼鏡店でアルバイトもするようになった。東洋人は若く見られるので、子供扱いされるのには弱ってしまうが、ドクターも秘書も、家族ぐるみで、バージニア州の田舎やピクニックに、時には大掃除にまでご招待下さるのだ。彼らとの生活のなかで、風俗習慣の違いからくる生活用語のニューアンスや、「身ぶり言語」の表現がとても面白く、私は深く興味をそそられた。これが後に、ドラマをとり入れた英語学習の研究を始める発端となった。

× × ×

ワシントンD・Cは外交官の家族や留学中の日本人が多いせいか、いつも日本人どうしで行動し、日本語ばかり話している学生たちがいた。

近頃はやりの「短期留学」というのも、まず集団でアメリカに到着、二十日間程度の特別日本人向けプログラムに出席、この研修が終ると、また団体となって各地を見学してまわる……というコースが多い。一、二カ月の研修やら見物で、本当に英語が話せるようになると思

われない。その程度の英語ならたいいの学生は始めから「話せた」のである。

今は亡き恩師の松本享先生が、日常会話は中学程度の英語力で充分こなせると言われたが、事実そのように思う。その程度のことならなにも遠くまででかけることはない。なぜ、一、二カ月アメリカを見てやろう、英語国民に強くなつてやろうと割り切つて旅に出られないのだろうか。そうすれば面倒を見てもらわれない分だけ実力も増し、心も強くなろうというものだ。

もし、大学レベルの研修旅行をしたいのなら、まず学校のテキストをよく読みこなし、英文の手紙位をすらすらとかけ、単語の知識も豊富にし、「聞く」練習を充分にしておいて、アメリカの一般学生向け夏期講座に出席した方が、相当高度な英語のブラッシュ・アップになるはずだ。

× × ×

ショートカットのヘアスタイルが良く似合う、小柄でくりくりした瞳が印象的な女性の友人、ミス・リンは、

今やれっきとしたキャリアウーマンとなって東京で働いている。

留学一年目に一切の経済援助が絶えてしまったのに、ものともせず、八年間かけて自力で大学を卒業した女性である。彼女の誇りは、不利な条件の多い東洋人の身で、安易に出られる大学などに移らず、働きながら、あくまでもジョージ・ワシントン大学の学士号を手にした——ということにある。実際、勉強だけでも気が狂ってしまった人たちもいるのに、仕事も両立させることは並たいていのことではない。その働いた経験が彼女のプロフィールに今も活かされている。

ある時など、あまりの辛さに堪えかねたのか、ある日キャンパスで顔を合わせたときに「わっ」と声をあげて泣きだしたことがある。ふだんは男性よりお酒は強いし、平気で会社にのりをまいたおむすびなど持参して、「おい、彼女、ブラック・ペーパーを食べているの!」とまわりのアメリカ人の目を青白させるような痛快な女性であった。

彼女はいまだに、「そのうちまたG・W・Uの大学院に行って修士号を取りたい」と口ぐせのように言っている。

る。まさに血の滲むまで英語を握りしめて離さない心構えである。

短期であれ、長期であれ、留学には結局この心意気が大切なのではなからうか。

表紙のことば

土屋 正男

「寒 紅 梅」

東風吹いて やまかげの土くろみ 池の面の

うすらひも とけ初める。

きさらぎの そらの青へのびた枝に

馥郁と咲き匂う 寒紅梅。

乙女子の くちびるのいろにも似て

愛らしく みずみずしい。

春は もうとなり。

特 別 寄 稿

観音菩薩と霊場めぐり



曾 田 文 雄

(島根大学教授)

んな名称、どんな性格、そしてどんな御利益があるのやら、一通りのことは心得ておきたいものである。

そこで、簡単に解説しておこうと思う。筆者だって、専門家では決していないのだから、誤りもあろうけれども、大略は知っていただけだろうか、と考える。

まず、観音即ち観世音菩薩が阿弥陀如来の補処（補処とは、その地位・境遇にまで達することが可能な能力の持主をいう）の菩薩として経典に記され、あまねく知れわたる

ここ数年来、観音様の霊場めぐりが、少なくとも山陰地方では、盛んに行なわれているようである。そもそも、この観音霊場めぐりなる行事は、関西に発生した行事が、やがて関東その他の地方へと及んだものであって、決して一地方だけの特有行事ではない。それにまた、「観音さん」と一言で片付けるには、種類も二つや三つでなく、かなり複雑な具合になっている。もしも、御詣りする機会でもあるならば、祭られてある観音様が、ど

ようになったのは、今から二千年も昔のことである。その後五百年ばかりは、その伝え通りに一面二臂（一つの顔、二つの腕）の柔和な顔付きであり、一方の手には蓮華を握るという至極単純な御姿であった。

ところが、右の期間が過ぎると、十一面とか千手とかの名称によってうかがえるような、多面広臂の観音が沢山あらわれはじめる。

これはどういうわけか、というに、たとい観音菩薩が理想とするところ、念願するところの源が「大慈悲」ということに置かれてはいても、対象となる衆生の境遇とか希望する所は必ずしも一樣と限らない。したがって、観音菩薩は、そういう相手の境遇あるいは希望し願にかけてくる衆生の一人一人に応じて、その姿の表現も相違することになる。為に、場合場合に依じて菩薩の姿が変化していけば、その度に変った呼び名が付けられることになるわけである。この様な観音をまとめて「変化観音」と呼ぶ。それに対し、以前からのものを「聖観音」と呼ぶのである。

変化観音には、幾通りもの御姿や呼び名があるが、その大部分は、印度の密教時代に現われたものである。而

して、密教の經典・儀軌の類に記されてある所から、「密教の観音」のような呼び方をする。一方聖観音の方は、右に対し「顯教の観音」とする。

ここにいう「密教」「顯教」について、一言申し添えるなら、密教とは、大日如来が説かれた秘密の教えであるのに対し、密教以外の宗旨は、釈迦が人々の能力と境遇に応じ、諸人に理解し易く、顯わに説かれた教えなのであり、為に顯教と称するわけである。いま一つ付け加えるならば、密教が秘密の教えとはいふものの、そこにいう秘密とは、何もひた隠しに隠す、というが如きものではさらさらなく、容易には悟り得ない、修行を積み、ある段階迄の経験を経ないことには知り得ない、という程の意味である。学生時代、現高野山大学学監の和田有玄師に、真言秘密における秘密の意を問うた際、靈妙不可思議の謂なり、と答えられたことを参考にされたい。ただし、密教でも、聖観音をもろもろの観音菩薩の第一として礼拝しており、顯教の側でも、聖観音と等しく変化観音を礼拝している。故に、わが家の宗旨が浄土宗だからといって、顯教の聖観音ならば拝むけれども、密教の観音様など眞平御免、などというわけにはいかな

い。宗教上の教え、その説き方からするならば、叙上の分け方がなされている、ということなのである。

それから、密教について、顯教と比較した場合、極めて厳格にもろもろの事柄がきっちり規定される、という特徴が挙げられる。例えば仏様が座られる蓮の台座について、これは元来エジプトに発した様式であり、婆羅門教を経て仏教に採り入れられたものである。だから、元々が仏教とは密接不離な関係にあるものではさらさらなかった。にも拘わらず、それがやがて無著を経て大成した密教の中に入った時、ここに離れ難い関係が生じ、仏は開敷芬陀利花に、菩薩は半開花に、声聞は俱勿頭花に坐す、という風な一定の様式が与えられるに至ったのである。左様な性格を一面に持つ教えが密教である所から、密教観音の御姿として例外でなく、經典内にははっきり示されているのである。したがって、それらの御像を刻み造るに際しては、必ずこれに従わなければならなくなる。が、顯教の聖観音については、こんな明示など細かくはない。だから、聖観音の方は、昔から種々な御姿で造られていたのであった。

万一、聖観音の御姿が最初から細かく一々の様式につ

いて規定され、記述されてあったのなら、変化観音が生れる余地などなかったに違いない。



以上で、観音様というのが、どんな菩薩なのか、発生と変遷とのあらましを述べ終えたことにする。それが阿弥陀如来の脇侍で等々のことは記す迄もあるまい。

そこで今度は、一つ一つの観音菩薩について説明していく。後でも触れるが、「六道」という言葉を耳にされたことがあるろう。その六なる数に関連して「六観音」が設けられているのである。これについて記したい。

まず「聖観音」。この観音は、右にも記した通り、勢至菩薩と並んで阿弥陀如来に随侍して西方極樂世界にまします、と「淨土三部經」の一つ『無量壽經』に説かれた観音を指している。そしてまた、これも「淨土三部經」の一つ『觀無量壽經』では、その御姿がくわしく述べられてある。要点をいうならば、阿弥陀如来と比べては、身体たゑの妙なる相などの様は違わない、ただ頂の上にある肉髻げんげだけが阿弥陀様には及ばない、ということである。『無量壽經』が翻訳されたのは三世紀の半ば頃、今

から千七百年前である。『観無量寿経』にしたところが、それは五世紀初めのことだから、随分古くから知れわたっていたことではある。

二番目は「千手観音」である。この観音様のことは、『千光眼秘密法経』という御経に説かれてあるもので、その御光からは二十五菩薩が現われる、と記される。これは正に、大慈悲の発露、あらわれとして、そのように表現されているわけである。そればかりでなく、人間には慈心というものが様々に存しているものであるが、その各々を満足させてくださる為の表現として、右の二十五菩薩から更に四十の菩薩がそれぞれに出現なさる、と説明がある。かくして、二十五菩薩の各々から四十の菩薩が出現なさる。二十五と四十とを掛け合わせるなら、総計は千となる。千手観音の名のいわれは、以上の通りである。同時に、その性格も、おわかりいただけたことと思う。

三番目は「十一面観音」。これは、衆生が抱いているところの十一通りの無明——即ちこの世のあらゆるものの、これを法というが、その法の道理なるものをどうしても了解できかねるところの愚痴、これが無明——その

十一通りの無明を断ち切って悟りの段階の最後に位置している、第十一地の妙覺、つまり仏の位に到らせようとしての願にもとづいて現わされた所の御姿がこれである。

四番目は「馬頭観音」である。この観音の御姿を画いたり彫ったりしたものを見たことのある人は、きっと、これでも観音様か、と思ったに相違ない。いわゆる慈悲深い柔和な御顔、という観音のイメージからはかなり隔った形相となっているのである。それは、一見不動明王に近い御顔と申してよい。どうしてそんな御姿・御顔なのか、というならば、これは元々が観音様というものは、慈悲ということを前面に立てて衆生を御救いくださる管のものでありはするが、衆生と一口にいつても、そこには種々様々なものがいるものであって、左様な慈悲一点張りの柔和な顔付きだけでもって、救済しようにも何としても受けつけかねる衆生すら中にはいるものである。そういう衆生に対しては、威力を示し、力で压えつけ、その上で導く、という手段が必要となってくるのである。そのような手続きが必要となる場合の観音様として、斯様に威力ある形相の観音こそ馬頭観音とい

う次第。

その場合、何故馬頭と申すのか、というならば、馬は、大口開いて食物や水を呑み食いする動物である。その如くに、六道衆生の生老病死の苦悩を食い尽す、という所から出たものである。因みに印度では、馬は獅子・象・牛と並んで四つの靈獣の一つに数えられ、大層尊がられてゐる。しかし、元來が菩薩であつて、何も馬とは直接結びつける必要などなかったものが、一旦その名前に結びついてしまうと、時代が下れば、頭部に馬の頭まづがのぞいてゐる形の觀音像さえ出てきたりする。細かく規定されてゐる筈のものさえ、名前には勝てない、という例がそこにある。

五番目は「如意輪觀音」である。この名の由來は、如意珠と輪との二字を組合わせることに拠つてゐる。如意珠とは、心の欲する所何でも生み出すことのできる珠をいう。それから、輪とは、世界を統一して善政を布く大王がこの世に出現なさる時に當つては、七つの宝がおのずと現われ、その大王が統治なさるのを助ける、と伝えられてゐる。そういう七宝の中にあつて、わけて金輪というのは、世界を転々と駆けめぐりながら反抗する者を

摧くだき破壊する、ということになつてゐる。少し年を召した人などの口から、金輪際などという言葉が、時折聞かれたりすることがありはしないだろうか。そこにいう輪こそ、如意輪における輪のこと、という次第。

以上述べ來つた五つの觀世音菩薩にあつては、どの宗派であらうが同じこと、六觀音のうちに数え込んでゐるものばかりである。ところが、次なる第六番目の觀音については、宗派によりいささか異なる所がある。

「不空羂索觀音」けんじやく。これを先述の五觀音と併せ六觀音とするのが天台宗である。羂けんとは網のこと。索とは魚を釣上げる所の糸を指す。衆生を魚にたとえ、菩薩が救ひ給う羂索、つまり網糸なるものは、迷える衆生を捕え、煩惱に沈みさまよつてゐる衆生を釣上げる、即ち救ひ上げ給うのであるけれども、その釣上げ方たるや、人間のそれとは甚だ相違して、釣残しなどの失敗は絶対ない。空鉄砲でない、空しくない、これ即ち不空なのである。左様な次第でついた名称。正に名は体を表わしてゐるわけである。

天台宗では、右述の通り、不空羂索觀音をもつて六觀音に算入するのに対し、真言宗では、代りに「准胝觀じゆんぢ

音」を充てる。もっとも、真言宗といっても、全部が全部というわけでもなく、派によっては、この准胝観音を加えることをしない派もあって、必ずしも画一的なものではない。

さて、この准胝とは、随分むずかしい文字で表わされたものである。胝など、一般の書物で見かけた例を持ち合わせない。但し、平安時代に作られた辞書には載っているから、古くから日本に伝わっていた文字なることは確かである。漢字としての意味は、タコとかマメ、あるいは胃袋、時としてアカギレを意味する。けれども、この観音様、別に買立ての靴をはいて足にマメを作られたり、寒中吹きさらしの中で手を濡らした仮おわしましたわけではない。梵語の音そのままを適宜漢字の似通った音で充てた所から出てきた名前であり、本来の意味するところは、「妙」とか「清浄」といった意味あいのものである。

この准胝観音で付け加えたいことがある。他の六つの観音菩薩に比べ、甚だしく異った面を有した観音なのである。

一体に、読者の皆様、仏像を拝見して、その御姿を

くづく眺められた時、この仏様は男性だろうか、それとも女性なのだろうか、と疑いながら御覧になった経験は御持ちでないだろうか。筆者、さる酒屋の奥様と観音霊場めぐりを行ったことがあるが、その夫人のいわく、観音様は女だとばかり思っていた、と告げられた記憶を持つ。一般には、仏様に男女の別などない筈である。もっとも、吉祥天、弁財天などの天人は、この際の仏様という枠から外してのことであるが。したがって、如來は勿論のこと、菩薩についても、男性・女性を云々する要はない筈のものが、この准胝観音菩薩だけは、女性ということがはっきりしている。そのわけは、先程記したように、准胝とは梵音そのままの漢字化であるが、梵語は、ドイツ語などと同様、名詞に性格が存している。而して准胝にあつては、これは女性名詞に相当する語なのである。であるから、この観音様に限っては、女性、ということになる。これが准胝観音についての大きな特徴というわけである。

○

以上説明した通りで、観音菩薩は七通りのものを掲げ

た。その中から各宗派では六つを選んで六観音としているのである。

次に観音霊場めぐりの方に話を移そう。

観音信仰に関する中国での具合については今触れないで、わが国における場合にしばって話を進めたい。

仏教が日本に伝えられたのは、『日本書紀』によれば、六世紀の中頃ということになるが、それ以降百年ばかりの間にあっては、殊更記すべきほどのものを見ない。それは、仏像こそ多数彫刻されてはいても、観音像が作られたという記録を全く見ないからである。観音信仰のことが具体的に記録に載るのは、天武天皇の時代に入ってからのこととなる。

まとめて奈良時代のことをいうならば、観音そのものは承知されていたとしても、それが極楽往生への導きとなるものである、といった思想など、未だ生じるに至らず、あくまでも現世利益なる立場でのみ理解されていたのであった。

平安時代に入り、十世紀を迎えると、例の平将門の乱、即ち天慶の乱がおこる。その乱が平定されて後、戦没者の慰霊祭が朱雀天皇の主催でもって、延暦寺におい

てとり行なわれた。これは特記すべき事件といえる。何故ならば、従来だと護国的現世利益が仏教信仰の根幹をなすものであったのに、この場合は慰霊祭であって、三界の群類万靈を救うという点に主眼の置かれた催しなのである。而して、そこでは、六観音が信仰される、という形をとったのであった。

右の事件のみならず、この十世紀ともなれば、六観音が天台宗内部では急速に注目され、発達しはじめる。そして、これが歴代の天皇の信仰と結びついて、貴族社会に広く及ぶようになっていく。そこには、六道輪廻の思想を基盤に置いた、観音菩薩の御力で輪廻から救われる、という考えが根底に存していたのであった。一体に、平安貴族達は、六道の苦相というものに対しては、強い強い恐怖を抱いていたのであって、このことが、六道においての厭離穢土という願求が六観音におすがりして救われる、という思想と結びつき、なおのこと六観音の信仰の発達を促すこととなったのであった。



平安貴族達は、しきりに宿世とか無常といった言葉を

口にする。このことは、現実を否定し浄土に生れ変るという思想に繋るものである。この思想たるや、奈良時代から続いていた律令の法に基づく身分秩序が忽ち崩れ去ってしまふ、そういう状態を目のあたりにし、戸惑い続けていた世人の心をしっかりとらまえていたものであった。

一、二の例を挙げよう。

源兼明という人がいた。この人は醍醐天皇の皇子で大納言にまで昇った人であったが、藤原兼道などの讒言によって免職させられ、十年不遇の中に歿した。この人が観音信仰に極めて熱心だったことは、かような現実の社会的不遇からきた不平不満に由来する、といつてよい。また、花山天皇、十七歳で即位されながら、わずか二年で退位。体が弱い、が如き理由では決してない。その証拠に、退位後二十二年も生きられたのであった。これは藤原兼家の謀略により、その息子道兼にだまされてのことであった。その謀略とは、兼家の第二女が生んだ一条天皇を早く帝位につけんとすることからであり、結局一条天皇は、わずか七歳で即位されることとなった。右の如く、天皇すら、その身分は決して安泰といえな

い。いわんや臣下ともなれば、日々の運命に戦々恐々たる有様であった。兼家の後は、長男道隆が氏長者となったが、やがて病歿し、その子息が後継者となったか、といえ、さに非ず、前に名の出た、あの花山天皇を退位に追い込み、共に出家しようといふは花山寺迄御伴しなから、逃げ帰ってしまった道兼が後を継いだ。ところが、これ亦十日ばかりで死んでしまふ。そこで今度は弟道長に権力の座が移る、という具合。榮枯盛衰まことに目まぐるしいものがある。

貴族間の権力不安定が心の不安を助長し、ここに宿世なる考えがより一層人々の心を占めるようになる。かうに現実が文字通り無常といふことであれば、左様な輪廻から逃避するには、仏の浄土を信じ、そこへ摂取されることを願う以外方法がないわけ。日本における浄土信仰は、かく六道輪廻を基盤におきつつ発達した、といつてよいであらう。

而して、六観音が六道にそれぞれいらつしゃって、さまよえる亡者をして、御救いくださった上、浄土へ向かわせてくださる、以上の思想が六観音なる信仰を確立させたのであった。

観音霊場めぐり、札打ちとも呼ぶが、いい伝えによれば、養老年間、大和長谷寺の得道上人が死後数日を経て甦えった。一旦死んで閻摩大王に会った際、「大期末だ限らず、本土に帰るべし」と申し渡され、また、観音の御堂が三十三か所あって、これを信仰することは人々に大いに福を与えることになる、とも告げられたのであった。これに対し、上人が「自分が甦えて人に告げても信じて貰えるか否か覚束ない」と心配したところ、三十三の印を賜わったという。それを後になって、例の花山上皇が使いを遣わし、それらの印を三十三か所に安置せしめられた、ともいう。

この花山上皇は、花山寺で退位薙髪の後、天下の霊場を廻られたとのことであるが、『新拾遺和歌集』巻十七に載せられた上皇御製に、

修行せさせ給うける時、粉河の観音にて、御札に書かせ給うける御歌

と詞書のあることからして、上皇順拜のこと乃至は、順札札を準備されていた、との証は明らかにできて、い

わゆる西国三十三番の札所として知られる今日の寺々がその当時からのものであったか、という点になると、それは否定されなければならない。というのは、上皇が亡くなられて以後、創建された寺の存することからして、いわゆる西国三十三番そのものであった、とはできかねるのである。

西国三十三番のもっとも古いところは、十二世紀初めの、天台座主となった行尊の記した書物中に見えるのが最初といわれる。この三十三という数は、観音菩薩が三十三身に応現し衆生を救い給う、という『観音経』に説く所に基づいており、この西国三十三番が真似られ、やがて東国にも、その他の国々にも設けられていったのであった。

西国なる名の由来、あるいは三十三か所の順路設定のこと、などまだ触れなければならぬこともあるけれども、本稿は、このあたりで終りとしてたい。

(一々の書名は掲げないが、既刊のものを大いに参考させて頂いた。深謝する。)

浄土句集



岩を囓む波の彼方に月登る
東京 鈴木 葉子

評 大きな景色である。太平洋の大波が寄せては返して岩を囓んでいるのである。其の彼方に月が登っているとは雄大だ。

高僧の浄土へ寂と冬の雲
埼玉 佐久間愛子

評 口に念仏称へつつ大往生を遂げられた静寂の中に、空には冬の紫雲が棚引き、観音勢至に來迎されて高僧はお浄土へ。

訪ふ人のあるたび出ずる冬籠
福岡 上滝津弥音

評 冬籠して居れば動きたくないのである

一田牛畝選



が、人が訪ねて来れば、その度に出て行かねばならぬ。来る人がなければ淋しいが、来て呉れても、またつらいのである。

懺悔して戒授かりし秋燈
東京 吉田ゆきあ

評 授戒をするには先づ懺悔しなければならぬ。懺悔し、反省し、授戒して真に仏弟子となる事が出来るのである。

白杖の少女いちらし冬の駅
群馬 島津 か寿

評 白い杖をついているのは盲である。盲の少女が遠い旅をするらしい。冬の駅に立っているその姿はいちらしい。

銭湯とありなつかしき夜長かな
東京 新井 新生

評 銭湯は少なくなり珍らしくなった。どの家も自家用の風呂となったからである。然し銭湯は若い人は兎も角として、年寄りには珍らしくなつたものだ。

息災を喜びあつて御慶かな
福岡 高良 慈風

評 年を越すことは、なみなみならぬ苦勞である。一夜明くれば新年を迎へたことをよろこび合うのである。一年の計は元旦にありで、また苦しいことがはじまる。

明月は独來独去我も亦
京都 安藤 寛

高原の芒手折りてバスガイド
東京 島居 千代

東京 阪入 等達
杉の実を竹鉄砲に子等遊ぶ

三重 森 静枝
いつまでも姑まかせなる十夜かな

神奈川 松本せつよ
落葉焚く煙の白き雑木林

東京 真野 竜
ゴンドラの麦藁帽の水夫かな

福岡 高良 幸代
メモ片手老も師走の人混みに

福岡 権藤みきを
満行に足どり軽し霜の礎

福岡 荒牧 還愚
雨の手に平戸土産の干飛魚を

福岡 服部 光代
天平のみ仏ならぶ時雨寺

大分 丹羽 離中
密葬のすんで時雨る御本山

福岡 原 敬二郎
日向ぼこ老呆患者仏顔

山形 松田 允子
反抗期迎へし子等よ虎落笛

福岡 行正 明弘
十夜鉦打ち手替りて早調子

福岡 永江 隆説
花苔の燈籠鑑ふ東光寺

東京 末常てる子
銀杏黄葉歩み静かに老紳士

福岡 前田 秀峰
兵隊の話尽きせぬ夜長かな

東京 小笠原香祥
柘榴売る夜店も並ぶ万燈会

東京 田中 秀代
病床に名月もなき今宵かな

福岡 国友 星畝
耳よせて音たしかむる盲汁

東京 栗原やえ子
土瓶蒸し柚子の香りに夫惚ぶ

東京 猪瀬 幸子
裙裏は京の色かも秋袷

福岡 新森 耕春
鍵かけて寝台車内蚊遣り焚く

東京 阪入志津枝
門閉ちて人影消ゆる夜霧かな

東京 真野よし子
久々の女二人に秋の酒

一田 牛畝
我もまた寝釈迦の如く逝かまほし

①句
②会
③だ
④よ
⑤り

一田牛畝先生歓迎句会

しお やま さん く
塩 山 三 九

(俳人・ホトトギス同人)

東京芝の天光院の檀信徒有志の天光句会は昨年も押し詰った十二月十九日、『浄土』俳壇の選者一田牛畝先生(ホトトギス同人)をお迎えして歓迎句会を催した。

天光句会は去る五十一年八月、四五名の有志が集まり俳句の勉強を始め、次いで毎月一回ささやかな俳句会の真似事をやり出したところ、新井新生会長の献身的な努力の甲斐あって、真野竜海住職の参加もあり次第に会員がふえて現在では会員十六名を数え句会としての体裁が整って来た。折柄浄土宗の機関誌「浄土」に俳句欄が設けられホトトギス同人の一田牛畝先生が選者となられた

ので一同勇躍これに投句するようになり、全国の浄土俳人達に伍して誌上に肩を世べ、中には牛畝先生のご高評を受ける榮を得るものも出て来て、会員の俳句熱は一層高揚するに至った。

我々は是非先生を一度東京にお迎えして親しく拝顔して教えを乞いたいと念願していたところ、『浄土』編集の原氏より先生が十二月中旬宗務のためご上京の予定と伺ったので、時こそ至れりと特にお願ひして時間を割いて戴けることになり、当日零時半より増上寺会館二階桐の間に席を設けることができた。ただ残念なことは年末でもあり急に決まったので、竜海住職外有力な一、二の会

員の都合がつかず、又在京の浄土投句者に呼びかける暇がなかったことである。

先生には定刻ご到着になり原氏司会の下に先ず各自が名乗りをあげた。先生は投句者の名前を一々覚えておられ、俳号の由来を聞かれるなど旧知の人に対する様な親しさの中で会が始まった。やがて簡素な昼食の準備が整い高々と乾盃して暫し歓談が続いた。

食事が終わったところで、当季雑詠三句の投句が告げられ、型通りに俳句会が進められた。

先生には普通選、特選をお願いし、更に特々選の三句に対し短冊のご染筆をおねだりした。このぶしつけのお願いにも先生から即座に墨痕鮮やかな御句を頂戴出来、且又最後にご懇篤なご高評を賜わり一同の感激は一しおであった。当日の牛畝先生の御句は次の通りで、羽子板市は前日浅草観音境内での写生句の由。

仲見世の雑踏羽子板市へ抜け

一田 牛畝

江戸情緒残る羽子板市に来て

一田 牛畝

天光句会々員の句を次に一人一句づつ――。

師の墓に読経流れて散紅葉 真野 竜

土産神に注連縄張りし巨櫛 阪入 等達

枯茨赤き実つけて地藏尊 阪入志津枝

増上寺山門でんと冬櫓 栗原八重子

冬の蝶薄日へにじり寄りにけり 鳥居 千代

三門に佇てば師走の風抜ける 新井 新生

冬日和三門高く増上寺 田中 秀代

少しづつ形になりし毛糸編む 鈴木 葉子

葛湯など振舞ひ老の茶話に 真野よし子

遠来の師迎へ師走句会かな 小笠原香祥

猿の画を版画に彫るや年の暮 吉原登起子

毛糸帽かぶりお地藏可愛らし 塩山 三九

原氏のご斜旋を深謝し、次の機会の早く来ることを念願して筆を措く。

○「浄土句集」欄へのご投句を、広くお願いします。ま

た皆様の折々の俳文等もお送り下さい。



心の日々

—『論語』のことば—

霧^{きり} 林^{はやし} 道^{みち} 義^{よし}

(詩人)

心がつまずくと、ひとは憂いの霧にとざされていく。
そういう時、われらは、ふと手にする書物があるのでは
あるまいか。

そして、心を洗おうとする。そして、みずから光とな
って生きて行こうと思うのだが、心はまたすぐ濁ってい
く。

以下は、そういう日々の自分との対話の一つである。

※

その言に炸(は)じざれば、則ちこれを為すこと難
し。

☆

憲問

なにを言っても恥じないということは、自分の言葉
《心》に責任を持っていないということだ。

ひとは、自分の立つべきところに立っていなければ、
何事も成就させ得ない。

われらは、われらの胸中にわきたってくる愛憎好悪の
想いに流されているばかりでは、いつしか追いつめられ
ていく。

※

これに居りて倦(う)むことなく、これを行うに忠を
以てす。

☆

顔淵

これは、弟子の子張が政治について尋ねた時の孔子のこたえである。

これは、しかし政治のことに限らない。事がなかなか成就しない時は、われらの心はいつとはなく倦んでくる。心が倦み飽きると、策謀や權威でこれを処置しようとたくらみがちだ。

けれども、孔子はあくまで忠(まこと)でこれに対処せよというのである。

※

君子はこれを己に求め、小人はこれを人に求む。

衛靈公

☆

君子は、何事も自分に求め自分を責めるが、小人はこれに反して何事も人に求め、人に矛先を向けていく。

なるほど人々の中には、万事を内なる問題としてとらえ、これを追求してゆく人たちと、反対に事態の殆んどを他の所為としてとらえていく類の人々がある。

だから、例えば後者の人々は、困窮に陥ると、世をなげき人を怨み政治をのしるのを事とする。

世の中が、どうなるうとも、その事態を受取る仕方

は、大別すればこの二種類になるだろう。

そして、どのように現状が悪化しようとも、それをより良くしていくことが出来るのは、その現状を自己の内なる問題としてとらえ得られた人たちによってであることを忘れてはならない。

※

人の己を知らざるを患(うれ)えず、人を知らざるを患う。

☆

人が、自分のことを知ってくれないことを氣にかけるな。人を知らないことを氣にかけることだという。

われらは、自分の心が平靜である日には、こうした言葉も素直に受け入れられていく。

しかし、ひとたび心がたけり狂ってくると、おれはおれはと、自分を振りかざしていく。われら凡愚は、そういう未熟な存在なのである。

孔子は、自分のことを、「われは生まれながらにして、これを知る者にあらず。古えを好み、敏にして以てこれを求めたる者なり。」(述而)と語っている。

だから、孔子もある時には、他人が理解してくれない

ことを氣にしたこともあるのだろう。だが、孔子は、そういうことに心を勞する己の卑小さに思い到り、その卑小故に自己を拡充させようとしていたのではなかったか。

われらは、われらの卑小さを悲しむ必要はない。われらが卑小であることは、そのことが即われらをより高貴なるものに展開させていく契機となっているからだ。

※

其のなす所を視、其の由（よ）る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人いずくんぞかくさんや、人いずくんぞかくさんや。

為政

☆

その人の行動と、その背骨と、その落ちつく所を見れば、その人物のすべてはかくすところなく現れて来るという。

しかし、何故か、われらは外觀を飾ろうとする。言葉と行為、内と外とが食い違いやすいのである。

しかも、われらはその生活の中で次々と憂いの種をまいている。

われらは憂いが色濃くなればなるほど、新しい展望を

求めはじめていく。そして、「道を行くに、こみちによらず」でなければならぬことを知りはじめていく。

※

士、道に志して惡衣惡食を恥ずる者は、いまだともに議（はか）るに足らず。

里仁

☆

機鋒の激しい孔子の一面の知られる言葉である。なるほど大志のある者は、惡衣惡食を恥ずるようなことはしないだろう。

だが、われらが展望を見失いはじめると、いつとはなく眼前の小利と、現前の美麗とを求めはじめているのである。だから、われらに自らの惡衣惡食を恥ずる心が生じてくると、それは志を失いつつある証左なのだ。

※

速かならんと欲することなかれ、小利を見ることなかれ。

子路

☆

早く事を仕上げようと思うな。小利を取ろうとするなというのである。

これは、孔子の弟子の子夏が、師に政治の要諦を尋ね

た時、それに応えた言葉である。

孔子は、その上、この理由まで付け加えている。

「速かならんと欲すれば、則ち達せず。小利を見れば、則ち大事成らず。」というのがそれである。

孔子は、うまずたゆまず順を追って事は行うべきだ、若しそうしなければ、ゆきとどかないことが多くなる。

又、小利にこだわると大局を見失う、そう考えている。

ここには勿論、子夏の人となりを見通している孔子の目も感じられるが、こういうことに孔子が目覚めていくためには、孔子もまたその自らの生活の中で、幾度となく苦汁をなめつづけていったにちがいない。そしてその中でふとっていったのだろう。

※

君子は、坦（たいら）かに蕩蕩（とうとう）たり。小人は、長（とこしな）えに戚戚（せきせき）たり。述 而

☆

君子は、平安でのびのびしているが、小人はいつまでもくよくよしている、という。

われら凡愚は、なるほどくよくよして、その生を過ごしている。だが、本当はのびのびと生きてゆきたいの

だ。

どうすればよいのか。

孔子は、かつて、自分の半生を省みて、われは学んでこれを知った者だとも語った。

孔子は常に四つのものを絶つことを自らに課していたと論語はいう。

その四絶とは、勝手な心（意）を持たず・無理おし（必）をせず・執着（固）をせず・我（我）を張らない、ということだ。

ところがわれらは、これら四つのものにとりつかれ、いつでもくよくよして時をすごす。

そして、ますますこの世を狭くする。

※

不仁者は、以て久しく約におるべからず 里 仁

☆

不仁の者は、長い間の困窮にはたえられない、という。

困窮（約）が長くつづくと、不仁者は乱れて、悪事を犯すようになるのだと古来の注はいう。

われらには、例えば、寒い風雪の日がやってくるよう

に、困窮も失意もまた必ずやわれらにおとずれてくるだろう。

われらには、決して得意の日ばかりが、あるわけではない。

われらに困窮や失意の日々がおとずれてくると、心に自暴や憎悪の念がわき立ってくるだろう。

だが、また一面では、失意や困窮は、われらの心を、より素直にし、より静寂にし、より求心的にしていこうともあるだろう。

そして、そこで、われらは全く新しい生への啓示を知る日もあるだろう。

◎『浄土』表紙版画販売についてのご案内

この度、新しく版画家の土屋正男先生をお迎えして、『浄土』の表紙をユニークな版画絵によって飾っていただくことになりました。さて、ご承知のように版画そのものは一枚の原版によって、数枚の印刷が可能で、そこで弊会では、土屋先生のご好意に甘えて、版画絵を豪華額縁に納めて、限定販売いたすことになりました。

額布価格は、額縁代・包装費等をあわせて、二五〇〇〇円です（送料は到着払い）。ご希望の方は、前金にて、当法然上人鑽仰会の左記の住所及び振替欄にお申し込み下さい。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。

（申し込み先）〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替（東京）八―八二―二八七



念佛ひじり三国志

(半)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

「専修の徒、安楽房も中原家の出自じゃ。同じ中原の親能、何か血族関係があるのだろうか」

那智ノ検校は盲目の琵琶法師生仏の宿房へきても追究を止めようとはしない。執拗であった。

「さあ……存じませんが」

坊門局は困じ果てて言葉を濁すばかりである。

知っているのだ、と生仏は直感した。知っているからこそ口外出来ぬのであらう。

坊門局が六時礼讃の勤習をとおして、安楽房遊西にそこはかとなひ好意を寄せはじめている事実を、生仏はす

でに感じとっていた。それは、師への畏敬や信頼をこえた感情でもあらう。だからこそ今、那智ノ検校が追究してくる問題の重味を実感しているにちがいない。

「ご存知ない。では別の筋から探ぐるしかないのう」

「そんなことは、院でおしらべになればじきに判明するであらうが」

明遍が不満を洩らした。

「いや、ご母公自身のお口から聞きただしておきたかった」

生仏にはこの言葉がふくむ意図が領解できる。

短期間ではあるが後白河法皇の側近に仕えた身だった。宮廷貴人の感覚では「言質」こそ絶対の証固となる

のだ。例えば今ここで坊門局が安楽房と中原親能入道との関係を証言したとする。以後彼らにつながる言動を評する場合つねに「仁和寺ご母公がおっしゃるには……」という前置きが付加される。あたかも彼らの言動に坊門局までが関与しているかのように印象づける。

「ところで安楽房とは、時たまお会いになられるのかな」
今度は明遍が質問してきた。

「さあ、存じませぬが」

坊門局はいよいよ防禦の姿勢を固くする。

「存ぜぬとな。しかし、彼安楽房から礼讃梵唄の手ほどきをお受けになったのでござろうが」

生仏は一寸いぶかった。明遍はなぜこんな質問を発するのか。それも、那智ノ檢校という正体不明の男がいる面前で。

「ああ、あのお方が安楽房さまなのですか」

とぼけとおした。彼女も「食言」の恐ろしさは充分に心得ていたようである。

あとは那智ノ檢校の独演会にかわった。口角泡を飛ばして彼は熊野の価値を力説する。

熊野こそは神国日本の故郷である、という。神となっ

前号のあらすじ

歴史上有名な「承久ノ変」は、尼御台北条政子と執権北条義時を中心とする鎌倉方と、後鳥羽上皇を盟主とする京都方の抗争であつた。後鳥羽院は、北面ノ武士のほかに新たに西面ノ武士を加え、また院のまわりに集まってくる人々も、才氣溢れる三浦秀能や呪術師尊長僧都などがいて、政争はいよいよエスカレートして行つた。そんな中で、ここに白拍子上がりの女一人、伊賀局亀菊の存在もまた、承久ノ変には欠かすことのできない登場人物であつた。亀菊こそ、後鳥羽院の寵愛をもつともよくした女性で、まさに承久ノ変そのものを動かした女性であるといわれている。

今、明遍は、祈願所最勝四天王院からの帰途、たまたまこの亀菊と同道することになる。そして亀菊は現在、かつての父信西入道の西洞院姉小路の旧邸に住んでいた。明遍の脳裏には、父の信西や兄の遊蓮房をはじめとする幼い日々のかいしい思い出がよぎる。

た民族の先祖（みおや）たちはみな熊野の山塊、那智の海浜に鎮座ましましてこの神国を守護し給うている。異国から渡来した仏教もこの神道と習合し、民族の基幹となる思想を熊野、那智の地に樹立しなければならぬ。

「最も敏感に、かつ智恵深くこの点にお目ざめになったのが後鳥羽院であらせられる。今や院は熊野の神々と親しくお話をかわすことも出来るようになったし、熊野

の山靈、那智の地靈水靈とお心をかよい合わせられてもいる。野卑な武士どもが覗き得られる世界ではないのじや」

長広舌は、とどまるところを知らない。

那智ノ検校とはいったい何者なのか。野心うつぼったる政僧か。はたまた神秘妖怪の幻呪師なのであろうか。生仏はじつと聞き入りながらその正体を把握しようとしている。盲目だから外形輪廓をなぞることは出来なかった。

だが、匂いがする。体臭である。おそらく同席の坊門局や明遍では嗅ぎとれなかったであろう。

生仏の鼻孔へこの体臭は強烈に沁みとおってきた。はて、何の匂いであつたか。

生仏は同類をさがし求める。

その日は、ついに思いあたらなかった。

一兩日が過ぎたか。生仏は早朝の広隆寺境内を歩いていた。いつもの散策である。

散策と言っても盲目の悲しさ。思いつくまま足の向くまま、というわけにはいかない。毎朝同じコースをたどるのである。

柿の木がある。その下に等身大の地藏菩薩が立っている。木影であつた。

生仏はそこまできて必ずひと休みする習慣がある。ただ休むのではない。木影のご仏体を長い時間かけて撫でまわし、祈りをこめる。

藤原の中級公卿の家に生まれた生仏は、生まれながらの盲目であつた。母は念持仏として屋敷の庭に地藏菩薩をまつた。幼い日からこの菩薩とは強い結縁があつた。その後、琵琶で身を立てるようになったが、随時随処で生仏は地藏との縁を忘れることはなかった。

広隆寺のこの地藏像は、太秦の婦化人によつて造立された、と聞いた。何でも界限切つての長者だったが子宝に恵まれなかった。最愛の夫人は次々に子を産んで、しかもどの子も当歳をこえずに次々と死んでいったそうである。その数じつに九人に及んだ。誰一人生き残ることは出来なかった。

九人目を身ごもつて、死産してその母親も息を引き取ったとき、太秦の長者は嘆きと追慕をこめてこの地藏像を寄進したという。

この悲話が、生仏には他人事とは思えないのである。

＜尾長鳥＞



すでに他界したわが生母も、地下で現在でも盲目の忘れがたみである生仏の身を案じているのではあるまいか。地蔵像を撫でまわす手の先に、幼い日母の身体に取りすがった感触がよみがえる。

今朝も生仏は、木彫の地蔵像をかき抱だき、その全身を指先で撫でさすっていた。深い情感の世界へ没入する。

頭上で羽ばたきがした。

百舌（もず）か。いや、羽ばたきは太仰である。もっと柄の大きい尾長鳥にちがいない。

柿をねらって梢の間を舞っているのであらう。しかし、この秋も深く、柿の果実はすでになかった。広隆寺の若い番僧たちが叩き落してしまったはずだ。

飢えた尾長鳥はいらだちの叫びを放ち、一転すると樹下にたたずむ盲目の人間目がけて襲いかかってきた。

生仏は瞬間、二の腕で顔をおおうた。鳥がねらう場所には顔面である。僧衣の袖にくちはしの先端を触れただけで尾長鳥は飛び去った。

「これだ！」

生仏は呟きを放っていた。

この匂いだ。今かすめ去った鳥が残した体臭。生仏はあの那智ノ校校から嗅ぎ取った同質の体臭をはっきりとよみがえらせた。

あの人の正体は、飢えた「鳥」であったのか。熊野や那智の山塊幽谷を飛翔している怪鳥――。

二

その日の午後だった。安楽房遊西が一人ふらりと、広隆寺の宿房へあらわれた。しばらくぶり、様子を見にきた、という。近ごろでは六時礼讃の勤習も生仏にまかせつきりになっていた。

「鎌倉へでもいつてらしたんですか」

「いや、ずっと京におる」

「中原親能さまとご一緒ではなかったのですか」

「親能入道とな」

安楽房はきょんとしている。

事情にうとい生仏は、誤解しているようであった。

「先日もお二人の話題がしきりと出ましたゆえ」

「わしと親能入道のことがか？ 誰が噂していのじゃ」

「……」

明かしたものでどうか、生仏は迷った。みだりな告げ口は避けたかった。

「わしと親能入道のことを。今ごろ、そんなことを詮索するのは、いずれ院の周辺、西面の奴ばらであろうが」

「親能さまはお身内でございますか」

生仏は問いただしておきたかった。

「血縁ではない。ただ、わしの実の妹が親能の内室になっておるわ」

「お内室さままで。では義理のご兄弟……道理で気になさっていたわけです。何やら高野の所領を鎌倉北条の武士どもが荒らしたとかで、その点お問いただしに親能さまが鎌倉へご下向なされました。仁和寺の宮さまの令旨をおたずさえになって」

「またしても領分争いか。近ごろは東と西でそんな争いばかりじゃ。それにしても親能入道の鎌倉下向が何でこのわしと関係があるのだろう」

「親能さまはすっかり鎌倉方へ従っておしまいに、そのまま彼の地にご滞在とか。私は安楽さまもご一緒かと勘違いしております」

そこで生仏は那智ノ検校の名を告げた。

安楽房の反応は空音だった。それはどこの馬の骨か、と言いたげな表情である。

「後鳥羽院のご信任も厚いお方のようにございます」

「那智ノ検校のう。聞いたこともない……もともと近ごろ、院のご身辺にはわけも判らぬ人間が次々とあらわれるようじゃからな。その那智ノ検校ひとりだけであつたのか」

「いや、明遍僧都と仁和寺の母公さま」

「明遍と坊門局じやと……これはまた奇妙な組合せじやのう。よもや明遍が高野山の代弁者でもあるまい。高野の蓮華谷にはおつたが山領のことなぞとは無縁なひじり。また仁和寺の母公君もその令旨とは関係がないであらう」

「はい、そのような感じはございませんでした」

「那智ノ検校が……のう」

安楽房はそのまま黙然と考えこんでしまった。

そんな無名人物が登場してきた後鳥羽院政の新地図は、何を志向しようとするのであらうか。

盲目だけに生仏には、かえって安楽房の心の動きが明

確に読みとれた。

「尾長鳥のようなお方でございました」

今朝嗅いだ野鳥の体臭を、そのまま告げてみたくなつた。安楽房にこの印象、感じ方が理解してもらえるであらうか。

「尾長鳥か……那智ノ検校がのう……荒々しい野鳥であつたな」

「さようで」

「うむ」

再び考えこんでしまう安楽房であつた。

それを汐に生仏は座を立つ。茶を入れにいった。最近、仁和寺の女御所から届けられたもの、宋渡来の「極上」の品だそうである。

ゆっくりと点じて安楽房にすすめた。それを服し、味覚を賞したあと、話題を一転させてきた。

「明遍僧都で思い出したが、どうも近ごろ、東山吉水のお身内でも奇怪な動きがある」

「東山吉水のお身内とおっしゃると、法然ご房さまに、でございますか」

「いや、ご房さまは少しお身体が弱まれただけで何もな

い。弟子たちの間でじゃ。せっかく専修念仏が新しい教団として成立、公認されようという矢先にのう」

「新宗として公認されるのでございますか」

生仏は事態の急転にとまどった。

比叡山から、また南都興福寺から激しい非難が専修念仏の上へ加えられたのは、ついこの間ではないか。法然ご房はそのため御制誡され、生仏らは二尊院で誓いの署名をやったばかりである。しかも、あとを追うように訴え出た興福寺奏状は、なかなか手きびしいものだ、と聞いてもいる。

「鎌倉の執権が強く後押しをして下さる。九条殿下（兼実）もお骨折じや。何せ信徒はすでにこの日本国をおおい、教主となられるお方は当代第一の僧、法然ご房じや。新しき宗門として認めざるを得ぬではないか。それを必死で妨げようとするのが南都北嶺だ。それも諸大徳、諸学匠はみな法然ご房を支持なされておる。忌まわしきは悪僧衆徒とやから、それと宮廷では反九条家、反鎌倉の無知な公卿どもじや」

専修念仏が置かれた現実の地点を、安樂房は適確に指示していた。ただし後鳥羽院政という新地図が描く地点

とのズレは把握し兼ねるようでもあった。

「その反九条、反鎌倉の勢力と結託しようとする者が、東山吉水の身内から輩出しはじめたのだ」

「お身内と申しますと」

「生仏、他言ははばかってもらいたいが、じつは外来の者ではなく、法然ご房に昔からお仕えした内輪の門弟にのう」

「法蓮房信空どの」

「うむ。信空も思いは一つであろう。わが専修念仏を、叡山の一派に組みこみたい、という点ではな。ただし彼は動いてはいない。若い善恵房などが最も臭さい」
「善恵房……証空さまでございますか。しかし、よもやあのお方が……頭脳明晰、他力のご信仰も鉄壁な証空さまが、師の法然ご房を裏切るなど」と

生仏は一両年前になるが、東山吉水の禅室で親しく善恵房証空から念仏の心髓を問法したことがあった。

証空は語った。

——自力ノ人ハ、念仏ヲ色ドルナリ。或イハ大乘ノ悟リヲモテ色ドリ、或イハ深キ領解ヲモテ色ドリ、或イハ戒ヲモテ色ドリ、或イハ身心ヲトトノフルヲモテ色ドラ

ント思フナリ。定散ノ色ドリアル念仏ヲバ、シオオセタリ。往生疑イナシト悦ビ、色ドリナキ念仏ヲバ往生ハ得セスト嘆クナリ。嘆クモ悦ブモ自力ノ迷イナリ。大經ノ法滅百歳ノ念仏、觀經ノ下三品ノ念仏ハ何ノ色ドリモナキ。白木ノ念仏ナリ。

一切の自性自力を捨てて絶対他力。後世になって善恵房証空(西山上人)の「白木の念仏者」と呼んだ説法の核芯を、生仏はすでに聞いているのであった。

念仏信仰の内容において、証空も安樂房にも「異心」はなかったはずである。師の法然を裏切った、と安樂房が断じたのは、その行動であらう。現実に対処してゆく集団内の政治的な動きであらう。

ただし盲目の琵琶法師生仏には、そのような行動軌跡を掌握できる機能は持ち得なかった。安樂房の「裏切り」という強い言葉に、この時点では衝撃を受けたただけであった。

「それで、証空さまをどのようになされるのですか」
弾ずんでくる息のなかで生仏は訊きかえした。生仏なりに激情がこみあげてくる。

「この際はだな、大事の前の小事じゃ。裏切り分子は処断しなければならぬ」

「処断とおっしゃると破門、追放ですか」

「破門や追放では手ぬるいわ。破門したとて、いずれ何処かで同志をかり集め分派活動をほしいますにするであらう。この手で処断しなければならぬ」

「その手で……」

「そうじゃ。息の根を止めてくれるのじゃ」

「ああ、安樂房さま。そ、それはいけませぬ」

生仏は叫び声を発した。

「それは、ならぬか」

「野鳥でございます。飢えた尾長鳥でございます。念仏者のなさることはありません」

必死に叫ぶのである。

「うむ……」

「安樂房さまに、このような説法がましいことは申し上げられませぬが、念仏者はひたすらに阿弥陀さまのご慈悲を待って、この世を力の限り生き抜いて、そしてお浄土へ連れて行って頂く身でございましょう。それが、往生の機を身勝手にこしらえて殺害や自絶、これは念仏者と

＜晩秋の嵯峨路＞



して絶対にえらんではならない道でございます」

「判っておる」

「法然ご房さまもつね日ごろから、くり返しおっしゃっていることです」

かき口説いているうちに、生仏は盲目の両眼から大粒な涙があふれて出てきたのを感じた。

法然ご房の教えに接してこの方、自分は一度だってこの世をはかなんでわが命を絶とうなぞとは考えなくなつた。生きる強い力を念仏信仰は教えてくれたのだ。

それを、それを専修念仏の一方の指導者ともあろう安楽房遊西が、かりに分派活動を始めているとは言え、他人を害(あや)めるとは……生仏は世界が逆さまになったような衝撃をおぼえるのであった。

三

晩秋の嵯峨路にはすでに底冷えた風が吹きかよっていた。道ゆく人は襟首や頭部を布でおおうたりする。太陽は厚い雲の背後にひそみかくれてしまった。今宵は山間部に降雪でもあるのではなからうか。

生仏は、供の喝食……かつじき少年僧にみちびかれ東

山への道を急いだ。

何としてでも吉水の禪室へゆきたかった。法然ご房とじかに会うことだ。同じ念仏じりの仲間で、殺し合いなぞが始まったらいいだろうことになるのか。教団の社会的信用の失墜はもちろん（生仏自身は全くそんなことは考えなかったが）、他力念仏の教義そのものにも大きな背反行為となるのである。

昨夕、あのまま帰っていた安楽房が翻意したとは思えなかった。安楽房自身が直接手を下すことはないとしても、彼の身辺には京在住の鎌倉武士が何人かいた。証空殺害を彼らに委嘱することもあり得るではないか。

広隆寺での朝の諸行事を終えて正午近く寺を出たのだが、盲人の足は手間取って吉水の禪室へ登り着いたのはもう夕刻近かった。

禪室は意外と無人だった。ふだんならこの刻限には日没の日課念仏が営まれているはずである。いくら少人数でも二十名は下らぬひじりたちの合唱が禪室の内外にあふれるのだ。ところがその声が全くない。

「生仏どのではござらぬか」

中ノ房の外縁から供の喝食に案内を請わせると、聞き

馴れた声が室内から応じてきた。

「欣さまですか。ご房さまに是非お目にかかりたく……」

「ご房さま、のう」

何やら口ごもっている。

「どうかなされたのでしょうか」

「うむ。一昨日来、おこりがまた始まってな、臥せていらっしゃるのだ」

「お苦しみで？」

「だいぶご難儀らしい。だからご日課も床の中でお勤め

ていらっしゃる」

「よくは見えますねが皆さま方、今日はお出ましのよう

で」

「じつは九条殿下、お身体がだいぶお弱りになってな、是非お別時を、とご所望があり、信空どのをはじめ皆小

松殿の方へお出かけじゃ。わしと善専房だけが留守りし

ているわけなのだ」

九条殿下、前ノ関白兼実も近ごろ病みがちであった。

その本復を祈るために屋敷で別時念仏会を営み、法然の

主要な門下はすべて出払ってしまったというのである。

「証空さまはいらっしゃるのですか」

「証空さまはいらっしゃるのですか」

「いま、枕で日没日課をご一緒に勤めておる」

「私も加わらせて頂きましょう」

生仏はためらわずに中ノ房の奥へ通っていった。かんじんの主人公、善専房証空がかたわらにいては話にくいわけだが、そのときはそのときで、と腹をくくったのである。

ふだん善男善女が上がりこんで法然からじかに説法を聞く表に面した広い座敷を通り抜けると、その奥が私室になっていた。

もの静かな念仏の声が洩れてくる。布団のなかに仰向き、合掌する法然上人。枕もとには善専房証空が端座していた。

生仏は部屋の端近く、法然の足もとに坐った。ただちに念仏へ和していった。証空はこの闢入者をちらり見やうって顔馴染みの生仏なので一瞬親しげな笑みを投げただ、無論盲目の生仏にはわからない。

小半刻ばかり続いた念仏が、やんだ。

「生仏どのじゃな」

いざり出て生仏が挨拶を言上する前に法然の方から声をかけてきた。

「はい……よくわかりで」

「いや、はいってきて念仏に加わったときからすでにわかっておった。そなたの念仏する声は、きわだって美しい。証空や欣西に混じると木鐸のあいだで金属が響いているようです」

そこで法然は、念仏をしつつ生活することの重大さを説法した。念仏する声そのものに感情や気分がこもっているというのである。聞き耳を立てなくてもそれらの感情や気分は自然と流れこんでくる。

「念仏の功つもれば、それがわかる。人間だけではない。いつも阿弥陀さまの慈悲深いお心までがつたわってくるのです」

「阿弥陀さまのお心とは、どんなものなのでしょう」

若い善専房証空が訊きかえしている。

「どんなもの？ これは説明が出来ない。また説明出来るようなものあれば、ニセものということにもなる……とところで生仏どの。そなたは今日何か心配事があってまいられたようだな」

「は、はい」

「お声は美しくつたわってきたが、不安におののくもの

が混じりこんでいた」

そのとおりだった。しかしこの場では打明けるわけにはいかなかった。じかに証空へ聞かせしきょうことは、問題に火をそそぐ結果を招き兼ねない。

しかし、法然はそれ以上追究しなかった。

「今宵はな。珍らしく吉水にも馳走がある。鹿ヶ谷の農家から山芋が届きました。粥ではない。強飯（こわめし）を炊いた。のう欣西」

法然は上機嫌で司厨係をかえりみた。

これほどの食慾があればおこりの病状も軽いのであらう。

「さあ、みなで仕度をしなさい。生仏どのに馳走して進ぜる。広隆寺の宿房などでは食し得ぬ美味ですぞ」

「さよう。あちらは韓国（からくに）ぶりと申しますか、やたらと豆が多いのです」

証空も欣西も厨へ立った。生仏は表の間で待つ供の喝食を呼び入れて手伝わせるように、と欣西に頼んだ。

法然と二人きりになった。この短い時間を活用しなければならなかった。

「さっきお上人もおっしゃれた心配事でございますが、

じつはあの善専房に危害を加えようとする人があらわれたのです」

「ほう、証空にな」

「名前は申上げられませぬが、お仲間のひじりどのでございませう」

「仲間のひじりが証空を……」

さすがに法然は驚いて息を吞んでしまったようである。あとの声が続かなかった。

（つづく）

|| 新刊 ||

安居香山 著

『煎茶道』

新書判 一五八頁 価八八〇円

○近年めざましい発展をみる煎茶道に関する必携の好案内書

（申し込み先）

〒102 東京都千代田区飯田橋一―二一六

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○昭和五十五年、一九八〇年代の輝かしい
 出発も、すでに梅の香の快く薫る二月に入
 った。いよいよ三月からは浄土一宗を挙げ
 ての、善導大師一千三百年のご遠忌法要が
 はじまる。ともかく浄土念仏の信仰は、こ
 の機会を得て、ますます全国の津々浦々で
 強く深く発揚されることであろう。弊会で
 も、今秋に予定される創立四十五周年の記
 念事業にあわせて、善導大師ご遠忌慶讃の
 ための努力を広く進めて行くつもりであ
 る。

○さて『浄土』誌の表紙絵は、正月号より
 洋画の久住静雄画伯から、版画の土屋正男
 画伯へとバトン・タッチされた。土屋先生
 は有名な棟方志功画伯の直弟子として、こ
 の道四十余年のベテランである。しかも新
 たな趣好として、この刷り上がりも見事な
 表紙版画絵を会員諸兄へ向けて、限定では
 あるが広く販売していただくということであ
 る。

ある。豪華額縁に入れた「正月号」表紙絵
 などとは、まさに今年のエト申年に因んで、
 格好の掛け物となっている。どうか毎月の
 表紙絵を楽しみにお待ち願いたいわけであ
 る。

○ところで『浄土』誌四十五巻十二月号に
 寄稿されたポール・リーチ上智大学教授の
 「浄土宗とカトリックを比較して」の一文
 は、随分と反響を呼んで好評であったよう
 である。大本山光明寺ご法主、石井真峯台
 下からは、文中の「石塚竜彦」は誤まり
 で、「石塚竜学」であるとの指摘をいただ
 き、丁寧なる一文を頂戴した次第である。
 この欄より深く感謝したい。

○「日々面目を新たに」——「人の一生は
 一日一日の積み重ね」といわれるが、とも
 かく一日を大切に、一日を尊びながら、こ
 の一九八〇年代という新しい時代に対応し
 て、精進努力して行きたいものである。
 父の春と母の春を担うわが春は

ゆう一

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

(送料不要)

浄土 四十六巻 二月号

昭和十年五月二日
 第三種郵便物認可

昭和五十五年 一月二十五日 印刷
 昭和五十五年 二月 一日 発行

編集人 宮林昭彦
 発行人 佐藤密雄
 印刷人 関 二三男
 印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鐵仰会

電話東京二六二局五九四四番
 振替東京八一八二一八七番

=新刊=

大正大学教授 竹中信常著

『私たちの浄土宗』

B 6 判 262頁 定価 1,000 円（送料200円）

◎信仰への道——浄土宗は、800 年前に法然上人によって開宗されました。本書は念仏信仰実践のための、浄土宗の檀信徒が知っておくべき基礎知識をやさしく解説しました。

『入門 寺の会計』（宮村久治著）

A 5 判 333頁 定価 2,800 円（送料200円）

『実用 仏教婦人全書』（名取盛雄著）

A 5 判 235頁 定価 2,800 円（送料200円）

『仏教常識小百科』（鎌田茂雄監修）

ポケット判 218頁 定価 1,000 円（送料200円）

好評 **寺だよりシリーズ**

「お寺と先祖供養」(No.1)

「お寺と法事の知識」(No.2)

「仏さまと生活のしきたり」(No.3)

新書判 14頁 定価 78円＜見本進呈＞

発行 創作社出版

〒 151

東京都渋谷区代々木2-6-13

加藤ビル

TEL 03 (370) 8331

振替（東京）1-71524